

(一) 沙門勝道山水を歴て玄珠を瑩く碑序を并せたり

『性靈集』(真濟編、十卷)に所収のこの碑文は、弘仁五年(八一四)弘法大師空海が、日光山(男体山)の開山勝道上人の開山行跡を讃えた碑文である。大師は勝道上人と時代がちがいで面識はなかったが、下野国出身の伊博士という官人の依頼と同博士からの情報に基づいて書いたと末尾に記している。この碑文の影響からか、日光には弘法大師が実際に来ているという伝えがある。なお、伊博士についての詳伝は不明で、学識豊かな婦化人の官職で一時期下野国に下向していて、帰京後大師にその碑文を頼んだ、と推測されている。

● 本文.. 蘇巔鷲嶽 異人所都 達水龍坎 靈物斯在 所以異人卜宅 所以靈物化産 豈徒然乎 請試論之

書き下し.. 蘇巔鷲嶽は異人の都む所、達水龍坎は靈物斯に在る。異人卜宅する所以、靈物化産する所以は、豈徒然ならんや。請う、試みに之を論ぜん。

私訳.. 須弥山や靈鷲山は仏・菩薩が住むところ、阿耨達池という龍の棲む池は不思議な力をもつ物がそこにいる。仏・菩薩が住むところを占い定める理由、不思議な力をもつ物

が子をを生むわけは、決してむなくはないだろう。願って、このことを試みに論じてみたい。

※註記1…蘇巔鷲嶽は、仏教の世界観の中心に立つ須弥山と釈尊の説法処として有名な霊鷲山（鷲峰山）。

※註記2…異人は、仏菩薩。

※註記3…達水は、ヒマラヤの北にあるという阿耨達池（あのかだつち）。阿耨達龍王が棲み、人間が住む瞻部洲を潤すという。

※註記4…龍坎は。龍が棲む池。

※註記5…靈物は、神（例えば、水神）のような不思議な力をもつもの。

※註記6…ト宅は、住むところを占い定める

※註記7…化産は、化が孵化（卵生）、産が出産（胎生）。

●本文…夫境随心變 心垢則境濁 心逐境移 境閑則心朗 心境冥会 道德玄存  
至如能寂常居以利見 妙祥鎮住以接引、提山垂迹 孤岸津梁 竝皆靡不依仁山託智  
水 臺鏡瑩磨 俯應機水者也

書下ろし…夫れ境、心に隨いて變ず。心の垢けがれれば則ち境ぞ濁る。心は境を逐おつて移り、

境の閑なれば則ち心朗らかなり。心境冥会すれば道德玄に存す。

能寂常に居して以て利見し、妙祥鎮く住して接引し、提山に迹を垂れ、孤岸に津梁た

るが如きに至っては、並びに皆仁山に依り智水に託し、臺鏡瑩き磨いで機水に俯應せざ

るもの靡きなり。

私訳・時に、(心の)認識対象は心に応じて変現する。心が不浄ならば認識対象は不浄なものになる。心は認識対象にしたがって移り変わる。認識対象が静かなら心は晴れ晴れとし、心と認識対象が融合一致してこそ道理が深遠に存在するのである。

釈尊(能(仁)寂(黙))が常に居られて衆生に利他の目を向け、文殊菩薩(妙祥)が恒に住して衆生に接し仏道に導き入れ、(地藏菩薩の)佉羅提耶山に仮の姿(化身)で現われ、(觀世音菩薩の)補陀落迦山で衆生を彼岸に渡す橋になるが如きに至っては、さらに皆(論語が言う)「知者は水を樂しみ、仁者は山を樂しむ」にことよせ、鏡台の鏡をみがき、衆生の機根に応じない者はない。

※註記1…境は、仏教で言う認識の対象。心は認識の主体。

※註記2…能寂は、能仁寂黙。釈尊の別称。「Śakyamuni」の通俗的語源解釈。

※註記3…妙祥は、文殊菩薩

※註記4…提山は、須弥山に近い、地藏菩薩の浄土・佉羅提耶山（佉羅多山・佉羅陀山）。

※註記5…身を仮の姿（化身）に替え変現すること。本地垂迹。

※註記6…孤岸は、觀世音菩薩の浄土・補陀落山。大師の「紀伊国伊都の郡高野の峯にし

て入定の処を請け乞はる表」にも「孤岸奇峰 觀世之蹤」とある。

※註記7…仁山は、『論語』（雍也第六）「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」。

※註記8…臺鏡は、一切を映す清浄な心の鏡、清浄心。

※註記9…機水は、衆生の機根を水に喩えた。

●本文..有沙門勝道者 下野芳賀人也 俗姓若田氏 神邈救蟻之齡 意清惜曩之齒  
桎枷四民之生事 調飢三諦之滅業 厭聚落之轟轟 仰林泉之皓然

書き下し..沙門勝道という者有り。下野芳賀の人なり。俗姓若田氏。神救蟻の齡に邈に  
書き下し..沙門勝道という者有り。下野芳賀の人なり。俗姓若田氏。神救蟻の齡に邈に

して、意清曩の齒に清し。四民の生事に桎枷されて、三諦の滅業に調飢す。聚落の轟轟

たるを厭いて、林泉の皓然たるを仰ぐ。

私訳・沙門勝道という人がいた。下野国芳賀郡（現、栃木県真岡市南真岡）の人である。

俗姓は若田氏で（父は下野国府（栃木市）の官吏若田高藤、母は明寿）、その魂は蟻を救う年令（十五才頃）にはるかに達しない頃、心は具足戒を受ける二十才頃に、清浄であつた。（しかし）土農工商のなりわいが手かせ足かせとなり、（大乘中観、または天台が言う）空・仮・中の三諦という無自性の道に腹をすかし、村落の荷馬車が響かせる大きな音を避け、山や泉の光輝く明るさを仰ぐ。

※註記1..救蟻は、仏教説話の蟻を救う少年の年令（十五才頃）（『雑宝蔵経』）。『雑宝蔵経』は、「無財の七施」など多くの因縁物語や比喻物語の説話で有名な原始経典。

※註記2..惜囊は、囊はふくろ、惜は失いたくないと思うこと。仏教僧が戒律を守ること  
は、海中（娑婆世間）で浮き袋（戒律）を手放さないことの喩え。

※註記3..桎枷は、手かせ足かせ。束縛。

※註記4..三諦は、（大乘中観、または天台が言う）空・仮・中の「三諦」。

※註記5..滅業は、無自性の道・考え方。

※註記6..皓然は、白く光り輝く明るさ。

●本文..粵有同州補陀落山 葱嶺挿銀漢 白峯衝碧落 礮雷腹而鼉吼 翔鳳足而羊角

魑魅罕通 人蹊也絶

書き下しこ…こ粵こに同じ州こに補陀落山こ有り。葱嶺銀漢そうらいぎんかんを挿さしみ、白峯碧落はくほうへきらくを衝つく。礮雷腹いんらいにし

てだ鼉だのごとく吼え、翔鳳しようほうふもと足あしにして羊角ようかくす。魍魅ちみ通とうこと罕まれにして、人蹊じんけい也また絶えたり。

私訳…ここに、同じ下野国に補陀落山がある。青い山なみは（夜空に）天の川をはさみ、白い雪が残る峰（または頂き）は青空を衝く。鳴り渡る雷鳴は山腹にあつて、（時の数だけ鳴いて時を知らせる）鼉のように吼え、天がける鳳は山麓にあつてつむじ風を吹かせる。魍魅魍魅も出没することはほとんどなく、人の通る道もまた絶えている。

※註記1…葱嶺は、青い山なみ。

※註記2…銀漢は、天の川、銀河。

※註記3…白峰は、白い雪が残る峰（または頂き）。

※註記4…礮雷腹は、鳴り渡る雷鳴は腹に響き、の意。

※註記5…鼉は、時の数だけ鳴いて時を知らせるというワニの一種。

※註記6…腹は山腹、足は山麓。

※註記7…翔鳳は、天がける鳳。

※註記8…羊角は、つむじ風。羊の角のように曲つて吹く風。

●本文・借問 振古未有攀躋者 法師 顧義成而興歎 仰勇猛以策意 遂以去神護景  
雲元年四月上旬 跋上 雪深巖峻 雲霧雷迷 不能上也 還住半腹 三七日而却還  
又天應元年四月上旬 更事攀陟 亦上不得也

書き下し・借問す、古より未だ攀じ躋る者有らず。法師え義成を顧みて歎きを興し、

勇猛を仰いで意を策ます。遂に去んぬる神護景雲元年四月上旬を以て跋み上る。雪深く

巖峻しくして、雲霧雷迷して上ること能わざるなり。還つて半腹に住すること三七日に

して却き還る。又天應元年四月上旬、更に攀陟を事とするも上ることを得ざるなり。

私訳・少々聞くとところによれば、(補陀落山は)古くから攀じ登る者はなく、法師(勝道上人)は釈尊(の偉業)をふり返つてため息し、(釈尊の)勇猛心を仰ぐにその意思を思ひはかった。(そして)とうとう去る神護景雲元年(七六七)四月上旬、(補陀落山に)登った。(しかし)雪は深く岩峰は厳しく、雲や霧や雷に迷い、(頂上に)上ることができなかつた。中腹まで戻り住むこと二十一日、退却して還つた。また(再度)、天應元年(七八一)四月上旬に登つてみたが、また上ることができなかつた。

※註記1…義成は、釈尊の幼名「シッタールタ (Siddha-artha)」の異名。「シツダ」＝「成」、  
「アルタ」＝「義」

●本文…二年三月中 奉為諸神祇 寫經圖佛 裂裳裹足 弃命殉道 纏負經像 至于  
山麓 讀經禮佛 一七日夜 堅發誓曰 若使神明有知 願察我心 我所圖寫 經及  
像等 當至山頂 為神供養 以崇神威 饒群生福 仰願 善神加威 毒龍卷霧 山  
魅前導 助果我願 我若不到山頂 亦不至菩提

書き下し…二年三月中、諸々の神祇の奉為に、經を写し仏を図画し、裳を裂いて足を裹み、

命を棄てて道に殉う。經像を纏負して山麓に至る。經を読み仏を礼して一七日夜、堅  
く誓いを発して曰く。もし神明をして知ること有らしめれば、願わくは我が心を察すべ  
し。我が図写する所の經及び像等、まさに山頂に至って神の為に供養し、以て神威を崇  
め、群生の福を饒にす。仰ぎ願わくは、善神威を加え毒龍霧を卷き、山魅前導して我  
が願いを助け果せよ。我もし山頂に至らざれば、また菩提に至らじ、と。

私訳…(それから)二年と三方月、天神地祇のために仏典を写し仏像を図画し、腰衣を引き  
裂いて足をつつみ、命を惜しまず仏道にしたがった。經像を背負い帯で背負い(補陀落

山の麓に行った。(そこで) 經を読み仏像を礼拝すること一週間、かたく誓いを発起して言った。「もし、神々を知るようであれば、願わくは私の心を察してください。私が図画し書写した經典や仏像など、まさに山頂に登って神のために供養し、それにより神威を崇敬し、衆生(人々)の幸福を豊かにしたいのです。仰ぎ願わくは善き神は威神力を加え、毒龍は霧が消えるが如くに退散し、山のモノノケは先導して私の願いを助け全うしてくれたまえ。私もし山頂に登ることができなければ菩提(サトリ)に至らないのと同じである」と。

※註記1…纏負は、背負い帯で背負うこと。

※註記2…群生は、衆生、人々。

※註記3…威は、威神力。

※註記4…(毒龍) 卷霧は、霧が晴れるように消えてなくなること。

※註記5…山魅は、山のモノノケ。鬼神・天狗など。

● 本文…如是 發願訖 跨白雪之皚々 攀綠葉之璀璨 脚踏一半 身疲力竭 憩息信宿 終見其頂 怳々惚々 似夢似悟 不因乘查 忽入雲漢 不嘗妙藥 得見神窟  
一喜一悲 心魂難持

書き下し…是くの如く願を発し訖り、白雪の皚々たるを跨ぎ、緑葉の璀璨たるを攀る。

脚を踏むこと一半、身は疲れて力竭く。憩い息むこと信宿、終に其の頂を見る。怳々惚々

として夢に似、悟りに似たり。查いかたに乗るに因らず忽ち雲漢に入り、妙薬を嘗めずして

神窟を見るを得たり。ひとたび喜びひとたび悲しんで心魂たま持ち難し。

私訳…このように発願し終つて、一面真っ白な白雪を踏み越え、珠玉のようにきらきら光る緑の葉のなかを攀じ登った。(ところが)脚を踏むこと道半ばにして、身体が疲れて力尽き、休息すること二泊、ついにその頂上を見ることができた。うっとりとして我を忘れ、夢に似てサトリのようでもあった。いかだに乗るわけでもなく天の川に入り込み、妙薬をなめたわけでもなく山の鬼神などが宿る洞窟を見ることができた。一喜一憂して心根を平静に保つことができなかった。

※註記1…皚々は、一面真っ白なこと。

※註記2…璀璨は、珠玉のようにきらきらと光り輝くこと。

※註記3…信宿は、再宿、二泊。

※註記4…査は、いかだ。

※註記5…神窟は、山の鬼神などが宿る、あるいは靈氣漂う洞窟。

●本文…山之為状也 東西龍臥 彌望無極 南北虎踞 棲息有興 指妙高以為儔 引  
輪鐵而作帶 咲衡岱之猶卑 晒崑香之又劣 日出先明 月來晚入 不假天眼 萬里  
目前 何更乘鵠 白雲足下 千般錦花 無機常織 百種靈物 誰人陶冶

書き下し…山の状たるや、東西に龍が臥すごとく彌り望むに極まりなく、南北に虎が踞

まるがごとく棲息するに興有り。妙高を指して以て儔と為し、輪鐵を引いて帶と作す。

衡岱の猶卑しきを咲い、崑香のまた劣なるを晒う。日出でて先ず明るく、月来りて

暁て入る。天眼を假りずして萬里は目前たり。何ぞ更に鵠に乗らん。白雲は足下なり、

千般の錦花機なくして常に織り、百種の靈物誰人か陶冶す。

私訳…山の形状は、東西に龍が横たわっているようで、ひとわたり展望するに極まりなく、  
南北に虎がうづくまっているようで、(鳥獸の)棲息がさかんである。須弥山を指さし  
て仲間とし、鉄圍山を引いて帶とし、衡山と泰山はなお卑しいと笑い、崑崙山と香醉山

もまた劣るとあざわらう。朝日が出ると先ず明るく、月は日暮れになって没する。天眼通を借りずに万里は目前であり、どうして（中国の黄鶴仙人のように）白鳥に乗る必要があるか。白雲は足下にあり、さまざま錦のような景色は機織り機がなくても常に織られ、多くの不思議な力をもつ物は誰が力づけたのだろう。

※註記1…妙高は、須弥山。

※註記2…輪鐵は、鉄围山。須弥山を囲む四海の外輪山。

※註記3…衡岱は、中国の道教の聖地五岳のうち衡山（南岳）と泰山（東岳）。

※註記4…崑香は、崑崙山と香醉山。崑崙山は中国の伝説上の靈山。玉を産出すると言う。

香醉山は須弥山世界で閻浮提の雪山の北にある山。香気が強く、それを嗅ぐと酔うと言われる山。

※註記5…天眼は、仏の神通力（六神通）の天眼通。

※註記6…鶴は、白鳥。中国の仙人黄鶴は鶴に乗って空を飛んだという。

※註記7…千般は、いろいろ、種々、さまざま、の意。

●本文…北望則有湖 約計一百頃 東西狭 南北長 西顧亦有一小湖 合有二十餘頃  
 阿坤 更有一大湖 冪計一千餘町 東西不闊 南北長遠 四面高峯 倒影水中 百  
 種異莊 木石自有 銀雪敷地 金花發枝 池鏡無私 萬色誰逃 山水相映 乍看絶

腸 瞻佇未飽 風雪趁人 我結蝸菴于其坤角 住之禮懺動經三七日 已遂斯願 便  
歸故居

書き下し…北に望めば則ち湖有り。約め計るに一百頃、東西に狭く南北に長し。西を顧れ

ばまた一小湖有り。合わせて有二十餘頃有り。坤を眇れば更に一大湖有り。霽い

計えれば一千餘町。東西は闊からず南北に長遠なり。四面の高き峯、影を水中に倒

にし、百種の異なる莊、木石自ら有り。銀雪を地に敷き、金花は枝に發す。池鏡に

私なく、萬色誰か逃れん。山水は相映じて、乍に絶腸を看る。瞻佇すること未だ飽か

ず、風雪は人を趁う。我れ蝸菴を其の坤角に結んで、之に住して禮懺し 動ば三七日

を経たり。已に斯の願を遂げ、便ち故居に歸る。

私訳…北を望むと湖がある。つづめて面積を計ると百頃（一万畝）、東西に狭く南北に長い。

西を見るとまた小さな湖があり、合わせて二十餘頃（二千畝）ある。西南の方角をながめると更に大きな湖がある。覆って計えれば一千余町（十萬畝）。東西は広くなく、南

北に長い。四面の高い峰はその影を水中に逆さまに映し、多くの異なる草むらには自然の木や石がある。銀色の雪が地面いっぱいには広がり、(光に映えて)金色の花が枝に咲いたように見える。鏡のような池水は私なく、すべての景色がそこに映っている。山と湖水はお互いに映し合い、たちまち腸が裂けるほどにめったにない美しさが見られる。眺めながらたらずみ未だ飽きないのに、風雪は人を追う払う。私はその(湖の方角の)西南の方角に粗末な庵を結び、そこに住して礼拝・懺悔を行い、何かにつけて二十一日が過ぎた。すでに、この(補陀落山上に登る)願いを遂げてもとの家に帰った。

※註記1…頃は、中国の田の面積で百畝。

※註記2…莊は、草むら。

※註記3…絶腸は、腸が裂けるほどにめったにない美しさ。

※註記4…瞻佇は、眺めながらたらずむこと。

※註記5…趁は、逐に同じ。追う、追い払う。

※註記6…蝸菴は、粗末な庵。

●本文…去延曆三年三月下旬 更經五箇日 至彼南湖邊 四月上旬 造得一小船 長二丈 廣三尺 卽與二三子 棹湖遊覽 遍眺四壁 神麗夥多 東看西看 汎濫自逸 日暮興餘 強託南洲 其洲則去陸 三百丈來 方圓三千丈餘 諸洲之中 美花富焉

書き下し…去んぬる延暦三年三月下旬、更に上つて五箇日を経、彼の南湖の邊に至る。

四月上旬、一小船を造り得たり。長さ二丈、廣さ三尺なり。即ち二三子と棹して湖を

遊覽す。遍く四壁を眺むれば神麗おびただ 夥しく多し。東を看、西を看れば、汎濫はんらんとして自

ら逸やすし。日暮に興餘り、強いて南洲に託たくけり。其の洲則ち陸を去ること三百丈來り、

方圓は三千丈餘なり。諸洲の中、美花富めり。

私訳…去る延暦三年三月下旬、(また)更に(補陀落山に)登つて五日、かの南湖の畔に行つた。四月上旬には一艘の小船を造り、長さは二丈(二十尺)、幅は三尺である。そして二三人の弟子と船を漕いで湖を遊覽した。余すことなく四方の山壁を眺めると、神秘的で美しい景色が数多くあった。東の方を見て西を眺めれば、湖水は充ち満ちて自ずからのどかである。日暮に興味が残り無理をして南方の中島に寄つてみた。その中島は陸地から三百丈(三千尺)こちらで、横縦面積は三千丈(三万尺)余りである。諸々洲の中に美しい花が豊富である。

※註記1…神麗は、神秘的で美しい景色。

※註記2…汎濫は、水を満々とたたえていること。

※註記3…逸は、安らか、安逸、気楽、ゆったり、のどか。

※註記4…興は、楽しみ。おもしろみ、興味。

※註記5…託は、ここは、かこつける〓ついでに寄つてみる、の意にとつた。

※註記6…方圓は、四角と円。横縦面積。

●本文…復更 遊西湖 去東湖十五許里 又覽北湖 去南三十許里 竝雖盡美 惣不  
如南 其南湖 則碧水澄鏡 深不可測 千年松柏 臨水而傾 綠蓋 百圍檜杉 竦  
巖而構紺樓 五彩之華 一株而雜色 六時之鳥 同響而異鳴 白鶴舞汀 紺鳧戲水  
振翼如鈴 吐音玉響 松風懸琴 砥浪調鼓 五音爭奏天韻 八德澹々自貯 霧帳雲  
幕

書き下し…復た更に西湖に遊ぶ。東湖を去ること十五許里。又北湖を覽るに南を去ること  
三十許里。竝に美を盡すと雖も惣じて南に如かず。其の南湖は碧水澄鏡にして深きこと  
測るべからず。千年の松柏は水に臨んで綠蓋を傾け、百圍いの檜杉かいさんは巖いわおに竦そびえて紺樓かんろうを  
構える。五彩の華は一株しゆにして色を雜まぜ、六時の鳥は響を同じくして鳴くこと異にす。

白鶴は汀みぎわに舞い紺鳧ふは水に戯る。翼を振るえば鈴の如く音を吐けば玉の響なり。松風しょうふう

は琴を懸け砥浪しろうは鼓を調しらふなり。五音争つて天韻を奏し八德澹々たんだんとして自ら貯おのずかえる。

私訳…また、更に西方の湖に遊んだ。東方の湖から約七十五町（九km）。又北湖を一覧すると南湖から百五十町（十八km）。両方とも美しい景観であるがおよそ南湖には及ばない。その南湖は青い湖水が澄んで鏡のようであり、深くとても計ることはできない。千年も経っている松柏は湖水に緑蔭のふたを斜めにつくり、五十尺の桧や杉は岩壁にそびえて青い楼閣のように見える。五色の華は一株に色を混ぜ、六時に鳴く鳥は同じように声を響びかせながら時を異にする。白鶴は波打ち際に舞い、青いカモは水と戯れている。翼を振ると鈴のような音をたて、声を出して鳴けば玉のような響きになる。岸辺の石を丸く砥ぐ波は鼓を打つしらべである。五音が争つて自然の音楽を奏で、（湖水の）八つの功德はゆつたりと自然に貯えられる。

※註記1…許里、中国距離の単位。日本では、一里〓おおむね五町（約五四五m）〓六町（六五五m）。

※註記2…百圍は、圍は中国の長さの単位の圍で五寸。百圍で五十尺。

※註記3…竦は、そびえたつ、の意。

※註記4…紺樓は、青く見える樓閣。

※註記5…五彩は、五色ニ青・黄・赤・白・黒。

※註記6…六時は、明け方・朝・午前・日中・午後・日没。

※註記7…汀は、水ぎわ、なぎさ、波打ち際。

※註記8…鳧は、鴨。

※註記9…懸琴は、松風の音が松の枝に琴を懸けたよう、の意。

※註記9…砥浪は、岸辺の石を丸く砥ぐ波。

※註記10…五音は。宮・商・角・徵・羽。

※註記11…天韻は、自然の音楽。

※註記12…澹々は、ゆったりと、の意。

●本文…霧帳雲幕 時々難陀之幕歴 星燈電炬 數々普香之把束 見池中圓月 知普賢之鏡智 仰空裏慧日 覺遍智之在我 託此勝地 聊建伽藍 名曰神宮寺 住此修道 荏苒四祀 七年四月 更移住北涯 四望無碍 沙場可愛 異花之色 難名驚目 奇香之臭 叵尋悅意

書き下し…霧の帳は雲の幕にして時々難陀の幕歴す。星の燈電の炬、數々普香の把り束ね、池中の圓月を見るに普賢の鏡智を知る。空裏の慧日を仰げば遍智の我在るを

覺る。此の勝地に託たくいて聊か伽藍を建て名づけて神宮寺と曰う。此に住して道を修し  
住じんぜん苒として四祀なり。七年四月、更に北涯に移住す。四望に碍さわりなく沙場愛すべし。異  
花の色名づけ難く目を驚かす。奇香の臭は尋ね巨く意を悦ばす。

私訳・霧のとぼりは雲の幕で時々難陀龍王が覆い歩く。星の灯りや雷の稲光りはしばしば  
〔『法華経』に言う〕明星天子（虚空蔵菩薩の化身）を把束し、湖中の円い月を見れば  
普賢菩薩の鏡智を知る。虚空に輝く智慧の光を仰げば遍き智慧が私のなかにあることを  
自覚する。この景勝の地にことよせて少しばかり伽藍を建て、名づけて神宮寺と言う。  
ここに住し仏道を修めているうちに何となく時が過ぎて四年が経った。延暦七年四月北  
のはてに移住した。四方の眺めに障りなく砂場も愛らしい。珍しい花は名づけるのも難  
しく目を驚かせる。稀な臭いは究明するのも難しく心を悦ばせる。

※註記1…難陀は、池水に棲む水神、難陀龍王。

※註記2…霧歴は、覆い歩く、の意。

※註記3…普香は、『法華経』序品に説かれる月天子・普香天子・宝光天子を、『法華文句』  
（智顛講述、灌頂筆録）が普香天子を明星天子、すなわち虚空蔵菩薩の応化身としてい  
ることに由来している。

※註記4…鏡智は、普賢菩薩の大円鏡智。

※註記5…神宮寺は、神仏習合により、神社に付属して建立された寺。

※註記6…荏苒は、何もしないまま時が過ぎること。

※註記7…四祀は、四年。

●本文…靈仙 不知何去 神人髣髴如存 忿歲精之無記 惜王侯之不遊 思餓虎而不

遇 訪子喬而適去 觀花藏於心海 念實相於眉山 蘊蘊遮寒 蔭葉避暑 喫菜喫水

樂在中 乍々乍々 出塵外 九臯鶴聲 易達于天

書き下し…靈仙、何にか去るを知らず。神人髣髴として存するが如し。歲精の記すこと

なきを忿り、王侯の遊ばざるを惜しむ。餓虎を思つて遇わず子喬を訪ねて適去る。

花藏を心海に觀じ實相を眉山に念ず。蘊蘊寒を遮し蔭葉暑を避る。菜を喫い水を喫んで

樂しみ(その)中に在り、乍ち々み乍ち々り塵の外に出づ。九臯の鶴の聲は天に達

し易し。

私訳…靈山に住む神仙はどこに行つてしまったのかわからない。(しかし)神仙は目の当り

に見ているようにも思える。中国前漢時代の文人東方朔がその『海内十洲記』に日光山を記さなかったことを忿り、文人遊客の王孫が遊ばなかったことを惜しむ。(釈迦前生譚の捨身飼虎にならない) 餓えた虎を思っても遇わず、(中国周代の仙人) 王子喬を訪ねても、予期することはできず、(大きな鳥になって) 飛び去っていた。(華嚴に言う) 蓮華蔵世界を心の大海(湖水)に觀じ諸法の実相を仏の白毫(須弥山||日光山(男体山))に念ず。密集した蔦・蔓は寒さをさえぎり繁茂した木の葉は暑さを避ける。野菜(蔬食||青物)を食べ水を飲んで、楽しみはそのなかにあり、にわかになりに少し歩んで佇みながら俗世の外に出た。奥深い沼沢で鳴く鶴のするように世間から離れて暮らしていても名声は自然と天にまで伝わるものである。

※註記1..靈仙、神人は、靈山に住む聖仙・神仙。中国の神仙思想。

※註記2..髣髴は、目の当たりに見る、ありありと想像する、よく似ている、の意。

※註記3..歳精は、『海内十洲記』を撰した前漢の文人東方朔のこと。『海内十洲記』は晋代以降の偽作とも言われる。「忿々」は日光山のこと。『海内十洲記』に記されていないことを怒った、の意。

※註記4..王侯は、古代中国の隱者王孫。隱者は世俗から離れ山に隱遁しながら詩を詠み学を好み景勝に遊ぶ賢人。

※註記5..子喬は、仙人王子喬。

※註記 6 .. 花藏は、『華嚴經』が説く蓮華藏世界。

※註記 7 .. 實相は、諸法実相。

※註記 8 .. 眉山は、仏像の眉間にある白毫の小さな出つ張り。須弥山に見立てる。

※註記 9 .. 蘊蘿は、密集したつた・かずら。

※註記 10 .. 彳は、少し歩いて立ち止まる。

※註記 11 .. 予は、たたずむ。

※註記 12 .. 九臯鶴聲は、鶴鳴九臯からとる。九臯は奥深い沼沢。世間から離れて暮らし  
ていても、名声が自然と伝わること。

● 本文 .. 去延曆中 柏原皇帝聞之 便任上野國講師 利他有時 虚心逐物 又建立華  
嚴精舍 於都賀郡城山 就此往彼 利物弘道

書き下し .. 去んぬる延曆中、柏原皇帝これを聞き、便ち上野國の講師に任ず。他を利用する

に時あり虚心にして物に逐う。又華嚴精舍を都賀郡城山に建立し 就此に就き彼に

往きて物を利し道を弘む。

私訳 .. 去る延曆十四年、桓武天皇が以上のことを聞き（勝道上人を）上野國の講師に任じ

た。他を利用するのに時間を費やし私心なく人びとに従う。また都賀郡城山に華嚴寺を建立し、ここかしこに行つて人々を利益し仏道を弘めた。

※註記1…柏原皇帝は、桓武天皇の別称。

※註記2…上野國は、群馬県。

※註記3…精舎は、今で言う寺。

●本文…去大同二年 國有陽九 洲司令法師祈雨 師則上補陀落山祈禱 應時甘雨滂霈 百穀豐登 所有佛業 不能縷說 杏日車難駐 人間易變 從心忽至 四蛇虛羸 攝誘是務 能事畢矣 前下野伊博士公 與法師善 秩滿入京 于時法師 歎勝境乃無記 要屬文於余筆 伊公與余 故固辭不免 課虛抽毫 乃爲銘曰

書き下し…去んぬる大同二年、國に陽九ようきゆうあり。洲の司は法師をして祈雨せしむ。師は則

ち補陀落山に上り祈禱す。時に應じて甘雨滂霈ほうはいし百穀豐登ほうとうたり。有つ所の佛業は縷しく

説くこと能わず、杏あま、日車とじは駐め難く人の世は變り易し。從心忽ちに至り、四蛇は虚羸あます。攝誘はれ務め能く事を畢わんぬ。

前の下野伊博士公は法師と善く、秩滿して入京す。時に法師、勝境の記すことなきを歎しよくき屬文を余の筆に要む。伊公余に與するが故に固辭摺れども免がれず。虚しきを課こころみ毫ごうを抽ぬきだし乃ち銘を爲つくつて曰く、

私訊・去る大同二年、国に災いがあった。下野国の国司は勝道上人に請雨法の祈祷をさせた。すなわち上人は補陀落山に登つて祈祷を行った。時が来て甘露の雨が大量に降り、さまざまな穀物は豊かに実った。保っている仏のような行いは詳しく説くことができないい。ああ、天がける車（太陽Ⅱ日）は留めおくこと難しく人の世は変りやすい。七十才にたちまち達し身体しんたいの四大はむなしく衰える。つとめて人々（衆生）を仏道に撰し誘導しよくなすべき事を成し遂げた。

前の下野の伊博士公は上人と親しく、（下野国での）官職を任期満了して京に帰った。時に上人、（日光山という）景勝の地が『海内十洲記』に記されていないこと歎き、私の筆で文章をつくることを求めた。伊公は私とは親しい間柄なので、固辞しても免れなかつた。（ともかくも）むだかもしれないが筆を執り銘をつくつて曰く、

※註記1・陽九は、災い、災厄。世界の終末を意味する陰陽の説。九は陽にあたる奇数の行きづまりの数とする説、また陽の厄が五で陰の厄が四であり、それを合せたとする説

がある。

※註記2…洲は下野国、司は国司。

※註記3…甘雨滂霈は、大量の甘露の雨、の意。甘露は、天子が仁政を行うと天から降つ

てくる甘い雨水。人に恵みを施す、の意。

※註記4…従心は、七十才。『論語』為政篇に「子曰く七十而従心所欲」とある。

※註記5…四蛇は、人間の身体の構成要素の地・水・火・風。四大。

※註記6…虚羸は、むなしく衰えること。

※註記7…秩滿は、官職を任期満了すること。

※註記8…屬文は、文章をつくること。

●本文…鶏黄裂地 粹氣昇天 蟾烏運轉 萬類跼闔

山海錯峙 幽明殊阡 俗波生滅 眞水道先

一塵構嶽 一滴深湖 埃涓委聚 晝飭神都

嶺岑不梯 鸞鷲無圖 皚々雪嶺 曷矚誰廬

沙門勝道 竹操松柯 仰之正覺 誦之達磨

歸依觀音 禮拜釋迦 殉道斗藪 直入嵯峨

書き下し…鶏黄地を裂き粹氣天に昇る 蟾烏運轉し萬類跼闔す。

山海は錯まじりい峙そばだち幽明阡を殊にす。俗波は生滅し眞水は道の先たり。

一塵は嶽を構え一滴は湖を深くす。埃涓委あいえんすておくも聚まり神都を畫飭がしよくす。

嶺岑は梯はしせず 鸞鷲は圖ることなし。皚々がいがいたる雪嶺は曷いすくんぞ矚誰いおりか廬せん。

沙門勝道は竹の操松の柯か。之の正覺を仰ぎ之の達磨を誦す。

觀音に歸依し釋迦を禮拜す。道に殉したがつて斗藪とそし嵯峨に直入す。

私訳・天地が混沌たる時 地を裂き、清浄な氣が天に昇った。ヒキガエルの住む月も鳥が住む太陽も運行し、あらゆる生き物がはびこった。山海はまじわってそばだち、あの世とこの世は道を異にする。世俗の波は生滅をくり返し、真理の水は道理の極みである。一つの塵は(積もれば)高い山となり、一つの水滴は湖の水を深くする。ほこりと水のしづくは捨ておくも集り、神仙の住む所(日光山)を描きかざる。山峰の頂上は雲の架け橋にならず、神鳥も山の高さを図ることがない。一面の雪で真つ白な雪嶺は何故に見、誰が庵を結ぼうか。沙門勝道は志操堅固にして竹の操や松の枝に喩えられる。そのサトリを仰ぎその仏法を誦す。觀世音菩薩に帰依し釈尊を禮拜する。仏道にしたがつて山林

修行を行い高くそびえる山に直入した。

※註記 1 .. 鶏黄は、鶏卵の黄味が白味に覆われているさま。天地がまだ分れない混沌、の意、

※註記 2 .. 粹氣は、清浄な氣。

※註記 3 .. 蟾烏。蟾は月にいるというヒキガエル。烏は太陽にいるという三羽の烏。

※註記 4 .. 幽明は、この世とあの世。

※註記 5 .. 阡は、道、あぜ道、墓道。

※註記 6 .. 埃涓は、ほこりと水のしずく。

※註記 7 .. 晝飭は、描きかざる、の意。

※註記 8 .. 神都は、神仙の住む所、日光山。

※註記 9 .. 嶺岑は、山の頂上。

※註記 10 .. 鸞鷲は、鳳凰の一種の神鳥。

※註記 11 .. 皚々は、一面の雪で真つ白な、の意。

※註記 12 .. 斗藪は、山林修行。

※註記 13 .. 嵯峨は、高くそびえる山。

●本文…龍跳絶嶽 鳳舉經過 神明威護 歷覽山河

山也崢嶸 水也泓澄 綺花灼々 異鳥嚶々

地籟天籟 如筑如箏 異人乍浴 音樂時鳴

一覽消憂 百煩自休 人間莫比 天上寧儔

孫興擲筆 郭詞豈周 咄哉同志 何不優遊

書き下し…龍は絶嶽せつげんに跳り鳳おどは舉りて經過へかす。神明は威護して山河れきらんを歴覽す。

山また崢嶸そうちうにして水また泓澄おうちようたり。綺花は灼々しやくしやくとして異鳥嚶々おうおうたり。

地籟ちらい天籟てんらいは筑ちくの如く箏そうの如し。異人乍たちまち浴して音樂時に鳴る。

一覽して憂を消し百の煩い自ら休す。人間じんかんに比莫たぐいなく天上むしに寧ろ儔ともがらあり。

孫興筆そんきようを擲なげ郭ことばの詞豈周こゝろからんや。咄哉とつがい、志を同じくして何ぞ優遊せざらんや。

私訳…靈獸の龍は水中より飛翔して険しい山の頂ぎで跳びはね、靈鳥の鳳は天高く舞い上がって四海の外まで飛び行く。天神地祇は山河を靈威で護り巡覽する。

山はまた高く険しく、水はまた深く澄んでいる。美しい花は光に照り映え、さまざまな鳥がお互いに鳴き合っている。

地上に吹く風も大空に吹き渡る風も筑や箏の音色の如くして、天人はすぐにその音色に反応し適宜音楽を鳴らす。

(天地を)一覽して憂いを消し、諸々の煩いごとは自然に休止する。人の世間には比類するものなく、天上界にむしろ同類はいる。

中国六朝時代、東晋の文人孫綽は筆を投げ、西晋。東晋の卜占家・予言者の郭璞の言葉はどうしてすべてを言い表すものであるうか。「咄哉」(オイオイ、ああ)、(勝道上人と)志を同じくして何故(人は)優遊自適しないのだろう。

※註記1..絶巘は、険しい山の頂上。

※註記2..神明は、天神地祇。

※註記3..歴覽は、次々と見て歩くこと。見て巡ること。

※註記4..崢嶸は、山や谷が高く険しいこと。

※註記5..泓澄は、水が深く澄んでいること。

※註記6..綺花は、美しい花。あでやかな花。

※註記7..灼々は、花が光に照り映えるさま。

※註記8..異鳥は、さまざまな鳥。

※註記 9・・嚶々は、鳥が鳴き合っているさま。

※註記 10・・地籟は、地上に吹く風の音。

※註記 11・・天籟は、空を吹き渡る風の音。

※註記 12・・筑は、中国（宋代頃まで）の弦楽器。細くなっている頸を左手で持ち、五弦を右手の竹棒で打ち鳴らす。

※註記 13・・箏は、和琴に似た長胴の弦楽器。

※註記 14・・異人は、徳のすぐれた天神・菩薩・仏。

※註記 15・・孫興は、中国六朝時代、東晋の文才の誉れ高い文人、孫綽。

※註記 16・・郭は、同じく西晋・東晋の文人・卜占家、郭璞。

※註記 17・・咄哉は、「こらこら」「オイオイ」「ああああ」など、叱咤したり嘆息する言葉。禅では「咄哉咄哉」と言う。「咄」を「拙い」と読む例があるが、どうか。

●本文・・人之相知 不必在對面久話 意通則傾蓋之遇也 余與道公 生年不相見

幸因伊博士公 聞其情素之雅致 兼蒙請洛山之記 余不才當仁 不敢辭讓

輒抽拙詞 竝書絹素上 詞翰俱弱 深恐玄之猶白 寄以瓦礫 表其情至

百年之下 莫忘相憶耳

西岳沙門 遍照金剛題

弘仁之敦祥之歲月次壯朔三十之癸酉也

書き下し…人の相知ること、必ず對面して久しく話すに在らず。意通ずれば則ち傾蓋の遇

たり。余道公と生年相見え、幸い伊博士公に因りて、其の情素の雅致を聞き、兼ねて

洛山の記を請うことを蒙る。余不才にして仁に當る。敢えて辭讓せず、輒ち拙詞を抽き、

竝に絹素の上に書す。詞翰俱に弱くして、深く玄の猶白きを恐れる。寄するに瓦礫を

以てし、其の情至を表す。百年の下忘れること莫くして相憶うのみ。

西岳の沙門遍照金剛題す。

弘仁の敦祥の歲 月次壯朔三十の癸酉なり。

私訳…人が互いに理解し合うのに。必ず對面して長く語り合う必要はなく、心が通じ合えば偶然出会った人ともたちまち親しくなるものである。私は、勝道上人とは生れてからこの方お会いしたことがなく、幸い伊博士から本心からの心情風雅を聞き、さらに補陀洛山（日光山）の登拝記を書くよう依頼を受けた。私は文才がないのだが『論語』衛靈

公篇十五に「子曰く、仁に当りては師にも譲らず」とあるので、敢えて辞退せず、ただちに拙い言葉を選び出し、白紙の上に書いてみたが、言葉も文も調わず、前漢の揚雄が説く「玄」（黒）が「玄ではない」（白）と揶揄される故事のようになることを深く恐れるのである。寄せ集めた言葉は瓦礫のようだが、私としては心をこめたつもりである。私は向う百年勝道上人のことを忘れず思いつづけるのみである。

高雄山寺の沙門遍照金剛記す。

弘仁五年八月三十日（癸酉）である。

註記1…傾蓋は、偶然に出会った人とたちまち親しくなること。『孔子家語』の故事。

註記2…道公は、勝道上人。

註記3…生年は、生れてからこの方の年数、の意。

註記4…伊博士公は、伊博士。

註記5…情素は、本当の心情、本心。

註記6…雅致は、風雅な趣き、上品なたたずまい。

註記7…洛山は、補陀洛山。すなわち日光山（男体山）。

註記8…仁は、他への思いやり（孔子）、惻隱の情（孟子）。儒家の思想が説く「五常」の徳の最初。「當仁」は『論語』衛靈公篇の「子曰當仁不讓於師」（子曰く、仁に当りては師にも譲らず）。

註記 9 .. 辭讓は、遠慮して辞退すること、謙遜して他に譲ること、謙讓。

註記 10 .. 絹素は、白絹。ここは白い紙。

註記 11 .. 詞翰は、言葉と文。

註記 12 .. 玄の猶白きは、前漢の思想家揚雄の『太玄経』（老莊思想を採り入れ、『易経』に擬した易学説）に説かれる老莊の根本原理「玄」|| 黒が白（「玄」ではない）と揶揄される故事。

註記 13 .. 情至は、人として自然な情、まごころのこもった心情。

註記 14 .. 西岳は、高雄山寺。現、神護寺。

註記 15 .. 敦祥は、「敦<sup>とん</sup>群」の誤記。敦群は十二支の「午」。午歳。すなわち弘仁五年の意。

註記 16 .. 月次は、毎月、月並み、の意。

註記 17 .. 壯朔は、陰曆の八月。